

研修だより

礎

発行所
いわき市教育委員会

発行責任者
教育長 吉田 尚



高校生の会話から

いわき市総合教育センター

所長 日野 俊 隆

今年の夏、いよいよ東京オリンピックが開催されます。私ごとですが、どうしても現地で観戦したい思いが強く、チケットの抽選購入に三度挑戦しました。しかし、すべて失敗に終わり、オリンピックを間近で見るという夢は極めて困難なものとなってしまいました。テレビで楽しみたいと思います。私は中学生の時にテレビで見たモントリオールオリンピックに感動し、今でもとても印象に残っています。小中学生にもぜひあの感動を味わってほしいと思っています。

さて、話はまったくかわりますが、先日、私が電車で通勤したときに、男子高校生が次のような会話をしていました。

「学校の先生なんて、だれにでもできるよな。」
これは、おもしろい話をしているな、と思い、聞き耳を立てていました。

「なんで？」

「だって、教科書に書いてあることをそのまま教えてるだけだよ。そんなの自分でできるよ。」

ますます興味がわいてきて、さらに耳を傾けました。

「教科書通り、そのままやってる先生なんていないよ。もっと、何でそうなるのか、知りたいんだよ。社会だって、教科書に書いてある重要語句の説明とか板書ばかりでつまらない。一人でできる。俺は、それと関連していることとか、教科書に書いてないこととかをもっと知りたいんだよ。」

さすが高校生、もの凄いいことを言っているなあ、と思っているうちに、いわき駅に到着しました。高校生と小中学生では、発達段階が異なりますが、先生方は、この話を聞いてどのように感じたでしょうか。私たち教員にとって、大変耳の痛い話だとは思いますが、考えてみれば、この高校生の言う通りかもしれません。

これからの教育は、「何ができるようになるか」のために「どのように学ぶか」が、学習内容以上に大切になってきます。そのためにも、学習者である子どもたちの学びを起点とした取組みが、これまで以上に求められます。

「授業とは、子どもたちが自分たちだけでは、決して到達できない高みにまで、自分の手や足を使ってよじのぼっていくのを助ける仕事である。」

林 竹二先生が「教えるということ」という著書の中で、述べられている言葉です。

私たちは、この言葉をしっかり受け止め、子どもたちの学ぶ意欲を大切にしているか、反対に学習する意欲を奪っていないか、子どもたちに単に知識を伝えることのみで終わっていないか、本来の「授業」をしているかどうかなど、再度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。AIには、とてもできない授業をしてみようではありませんか。

平成30年度・令和元年度いわき市総合教育センター調査研究委員会

調 査 研 究 報 告

1 研究の概要

調査研究委員会では、平成30年度・令和元年度の2年をかけて、調査研究委員自らが授業改善を目指して、多くの授業実践を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての研究を行ってきました。授業では、2台のビデオカメラを使用して授業の様子を「教師の指導」と「児童生徒の学習」の2方向から撮影し、授業の分析をしてきました。そして、授業改善のために有効な手立てを中心に、短い時間で視聴できる動画を編集しました。今回は、実践資料を分かりやすくまとめ、「教師力 up の素」として、ネットワークドライブ上にアップしました。校内研修や自己研修に本資料を有効に活用し、指導力の向上に役立てていただければ幸いです。

2 研究のねらいと視点

新学習指導要領改定の大きな趣旨である3つの資質・能力の育成を図るため、子どもたちが「どのように学ぶか」という視点から「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の在り方に関する調査研究や授業実践を行うとともに、実践結果を市内教員が取り組みやすいようにまとめることをねらいとしました。

3 資料の活用について

- ・ 実践資料……Ⅰ 単元構想シート Ⅱ 授業解説シート（「授業動画」を含む） Ⅲ 評価結果シート
- ・ 上記の3つのシートが、教職員PCのKドライブ上にアップロードされています。
- ・ 教職員パソコンでのみ視聴可能です。（※個人情報、肖像権の関係からデータの持ち出しはしない）
- ・ 校内研修・自主研修での活用をお願い致します。

国語科部会

1 授業改善の視点

国語科では、単元の目標（三つの資質・能力）を育むことに焦点を置いた授業作りを目指した。

そのために、次の2つの視点を授業改善のポイントとした。

- (1) 単元における「期待する児童生徒の姿」を設定し、「身につけたい力（単元全体・単位時間ごと）を明確にした単元の構想
- (2) 児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業者によるコーディネート

この2つの視点を意識することで、単元全体を俯瞰した授業作りを行った。

2 実践内容

【教材との出会い・学習課題の把握】

- 既習事項の振り返り
- 魅力ある課題や教師のモデルの提示
- 児童・生徒の問いや思いを大切にしたい学習テーマの設定

【課題の追究・解決】

- パワーメーター・マトリックス図・イメージマップなど、思考を整理するツールの活用
- 話し合いの論点の提示と目的に応じた場の設定
- 思考を広げ、深めるための問い返しやゆさぶりの発問の精選
- 主体的な話し合い活動を進めるための発達段階に応じた継続的な指導

【まとめ・振り返り】

- 自分の言葉でまとめる時間の確保
- 感想や意見の共有

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 教材との出合わせ方を工夫することで興味・関心を高め、学習の見通しを持たせることができた。
- 思考を助けるツールを活用することで、個に応じた見取りと支援をすることができた。
- 目的を明確にして話し合わせたことで考えを比較し吟味することができた。
- 教師が本時のねらいに迫るためのコーディネート力を身につけることが大切になる。

算数・数学科部会

1 授業改善の視点

算数・数学科では、「主体的・対話的で深い学び」の充実をめざし、視点を明確にして研究を進めた。特に「深い学び」について、小学校では「つまずきを取り上げ全体で共有して解決できる場面を設定する」、中学校では「単元を通して身につけた知識・技能や思考力・判断力・表現力を日常生活へつなげる場面を設定する」として授業研究に取り組んだ。

2 実践内容

小学校5年では、「わる数が小数になる計算の方法」について授業を行った。児童の興味・関心を引き出すために発問の仕方を工夫し、既習の「整数でわる計算」と比較しながら1mの値段を求める有用性を感じさせた。課題解決の場面では、児童のつまずきを共有させることで、対話的な学びを促すとともに、「小数でわることの意味」を数直線等を用いながら具体的に表現させるように工夫することで理解を深めることができた。

中学校2年では、連立方程式の利用の場面で学習形態を工夫しながら、課題解決を行った。第1学年で学習した「一次方程式の利用の学習」をもとに個々の考えをグループで共有し、式の意味や立式の方法を話し合わせることで、生徒自身がつまずきを把握し、解決策を見い出すことにつながった。

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- つまずきを共有させることで自分の考えとの共通点・相違点が明確になり、論点を焦点化させることで話し合いを深めることができた。
- 自分の考えをわかりやすく伝えようと数直線等を用いて表現方法を工夫する姿が見られた。
- 考えを共有するために他の児童生徒の考えを予想・再生させるなどの活動を意図的に行ったり、教師が学習のねらいに迫るためのコーディネート力を身に付けていったりすることが重要になる。
- 対話的な学習を進めるために、個々の学習の様子や変容を見取るための机間指導の充実が必要になる。

社会科部会

1 授業改善の視点

主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、社会科部会では、次の4点を考えて授業改善に努めてきた。

- (1) 課題追究の見通しをもたせ問題解決的な学習を展開するため、資料提示を工夫する。
- (2) 多様な見方を引き出し、考えを深めるために、子ども同士の学び合いの場を確保する。
- (3) 自分の考えを、根拠をもとに表現させる。
- (4) 学習の継続性や社会参画を意識させる。

2 実践内容

- (1) 小学校3年「市の様子」の実践
 - ・ 調べ方を選択し、資料を自由に活用して自力解決をする場面を設定する。
 - ・ 子ども同士が、自由に交流する場を設定し、全体での話し合いにつなげる。
 - ・ 表現の仕方を提示し、根拠をもって説明できるようにする。
 - ・ 学習したことをもとに、新たな問題を解決する場を設定する。

(2) 中学校3年「現代の日本と世界」の実践

- ・ 資料をもとに、課題について多面的に考える。
- ・ 友達との交流を通して、考えを比較・検討したり、新たな気づきや発想につなげたりする。
- ・ 思考の変化の過程を大切にし、課題について根拠をもとに表現できるようにする。
- ・ 学習したことをもとに、今後の日本と諸外国との関係について考え、提案する。

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 資料の「デジタル化」や考えの「見える化」は、問題解決的な学習を進める上で効果的だった。
- 友達との学び合いにより、思考の深化や広がりが見られた。
- 実践を通して、自分の考えを根拠をもって表現できるようになった。
- 深い学びを実現するためには、資料を精選し、友達との交流方法を工夫する必要がある。
- 児童・生徒の意見や考えをつなぐ教師のコーディネート力が大切になる。

理科部会

1 授業改善の視点

理科では、単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成のために、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を図っていくことが重要である。特に、「深い学び」については、様々な知識がつながって、より科学的な概念を形成することに向かっているか、日常生活などにおける問題発見・解決の場面で働かせているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。

2 実践内容

理科部では、「深い学び」の実現に向けた授業実践を行った。

小学校5年「植物の発芽と成長」

小学校6年「物の燃え方と空気」

中学校2年「酸素がかかわる化学変化」

中学校3年「物体のいろいろな運動」

また、H30コアティーチャーによる以下の単元の授業実践を録画し活用して実践した。

中学校2年「動物の生活と生物の変遷」

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 未知の現象を提示し、既習事項を活用して考える学習を行ったことで、学習内容と自然の現象とを結びつけ、理解を深めさせることができた。
- ホワイトボードを用いて実験結果を対話を通して考察を行ったことで、問題に対するより妥当な考えを子ども自身がつくりだすことができていた。
- 授業の導入と振り返りで同じ事象を提示したり、身の回りの事物・現象と関わる適用問題に取り組ませたりすることで、自分自身の変容を実感させることができた。
- 問題解決的な学習を進める上で、「深い学び」の実現に向けての子ども同士の対話する時間や振り返りの場面の設定など時間の確保が課題であり、単元全体を見通した学習計画や時数配当を行っていききたい。
- 小・中学校の学習内容のつながりを意識しながら、各学年で身に付けるべき資質・能力の育成を図っていききたい。

ドバイスをする。ファンレターについて質問したり、答えたりして、内容について考える。

外国語活動・英語科部会

1 授業改善の視点

平成30年度より、中学校だけでなく、小学校の外国語活動の授業改善にも取り組むこととなった。多くの先生方の今後の授業改善のヒントとなればと考え、これまでによく取り組まれてきた言語活動に、「目的・場面・状況」を明確にした言語活動を加えた。伝えたいことをうまく表現できない体験をさせてから、「どうすれば相手に伝わるか」と考えさせることで、「主体的・対話的で深い学び」に迫れるよう、授業の改善に取り組んだ。

2 実践内容

(1) 小学校6年「Unit8 What do you want to be?」

◎ 主な学習活動

聞いたり話したりするやり取りを通して発表への手立てについて考えを深め、自分の発表に生かすことができるようにする。

(2) 中学校3年「Daily Scene2 Fan letter」

◎ 主な学習活動

級友のファンレターの下書きを読み、ア

3 成果と課題（成果：○ 課題：●）

- 小学校・中学校ともに、担当教員がクラスルームイングリッシュを多用し、ALTとのモデル対話を見せることで、児童生徒が英語でのコミュニケーションにチャレンジする姿勢が育った。
- 小学校では「いわき駅前でテレビ局のインタビューを受ける」、中学校では、「ファンレターを書いて送る」という実践的なコミュニケーションの場面を設定することで、主体的に活動に取り組ませることができた。
- 「これで大丈夫なのか」と教師側から疑問を呈することで、さらに課題達成のための児童生徒の深い学びにつながった。
- 事前にALTとの打ち合わせをしっかりともつことである。共通の目標を持って、授業に臨むことで、本来の授業の活動から離れないようにすること、小学校の担任、英語科教師が中心となって活動に取り組ませ、ALTや級友とのやりとりから、コミュニケーションの基礎を養うが必要になる。

道徳科部会

1 授業改善の視点

道徳科における「主体的・対話的で深い学び」とは「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める」ことにより実現されるものと考え、研究に取り組んだ。

2 実践内容

- (1) 小学校5年「ノンステップバスでの出来事」
(親切、思いやり)
- (2) 小学校6年「手品師」 (正直、誠実)
- (3) 中学校2年「47年に感謝をこめて」
(よりよい学校生活、集団生活の充実)
- (4) 中学校3年「言葉の向こうに」
(相互理解、寛容)

3 成果と課題 (成果：○ 課題：●)

- 「もし自分だったら」「自分なら何ができるか」と問いかけることで、自分事として考えさせることができた。
- グループで意見を交換したり、主人公以外

の立場になって考えたりすることにより、様々な考えに触れ、多面的・多角的な考えをもたせることができた。

- 道徳ノートの活用や事前アンケートの工夫により、考えの変化や深まりを子ども自身が実感することができた。
- より深まりのある授業にするためには、話合いで出された発言を教師がいかにかコーディネートしていくかが課題であると感じた。
- 道徳科の授業での話合いを、児童生徒一人ひとりの思いを引き出し、深まるものにするためには、日頃からの人間関係作りが重要であると痛感した。自分の意見を遠慮せず発言したり、仲間の話を受容したりできるような集団づくりを行うことが大切になる。



・言葉のプレゼント (気持ちの受け渡し)

(2) 中学校

- 特別活動での実践
 - ・ブレイン・ライティング法
 - ・KJ法 ・一人一役の発表
- 数学の授業での実践
 - ・予想・課題解決へ向けての役割分担
 - ・考えの共有

3 活用と効果

生徒指導が機能する場面を意識して見てみると、学校生活の中には、いつでも、どこにでも存在していることに気付いた。普段の何気ない活動においても声かけ等を工夫することにより、児童生徒の自尊感情や自己肯定感、自己有用感を高めることにつながる事例もあった。今回の実践は、あくまで提案であり、効果的な生徒指導のあり方についてあらためて考える機会としていただければ幸いである。学校の実態や教師の持ち味を生かして、先生方ならではの「生徒指導の機能を生かした授業」を確立していただきたいと思う。

生徒指導部会

1 研究方針

本部会では、学校生活の大部分を占める授業や係活動こそ、積極的な生徒指導を進めるにあたって中核となる3つの機能「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」が最大に発揮される場であると考え、自尊感情や自己肯定感、自己有用感を高めるための有効な手立てについて、授業実践をとおして調査研究を行った。

2 研究内容

小学校、中学校それぞれにおいて生徒指導の3つの機能を、日々の授業の活動の中でどう生かすことができるかという点に重点をおいて授業実践を行った。

- (1) 小学校
 - 理科の授業での実践
 - ・一人一人の予想の可視化
 - ・実験での役割分担・児童へのフォロー
 - 道徳の授業での実践

特別支援部会

1 研究方針

特別支援教育においては、個別の教育支援計画と指導計画の活用が進まないことが課題としてあげられる。そこで、研究主題を「個別の指導計画を基にした児童生徒へのより良い支援のあり方」と設定した。「プロトコルを用いて、児童生徒の学習上、生活上の課題を明確にし、その課題に対する支援を具体的に明記できる個別の指導計画の在り方を検討することによって、個別の指導計画を基にした児童生徒へのより良い支援につながるのではないか」という考えのもと、研究を進めた。

2 実践内容

(1) プロトコルの活用

自立活動6区分 174項目に分類した



学級の実態、生徒一人一人の実態把握



個別の指導計画の作成

(2) 個別の指導計画の様式の検討

上段 長期目標と児童生徒の「よさ」や「得意なこと」を記入する。

下段 プロトコルによって明確になった児童生徒の「課題」や「不得手なこと」を自立活動の6区分に合わせて記入する。また、それに対する「支援」や「手立て」を具体的に記入する。

(3) 授業場面での手立ての活用

個別の指導計画から授業において必要な支援を明確にし、実際の指導にあたる。

3 成果と課題

プロトコルを用いることで、児童生徒の課題が明確になり、具体的な支援策を考えることができた。また、支援策が具体的なため、評価がしやすくなった。これらをさらに活用するためには、担任以外の教師や保護者等の参画、連携を深めていくことが大切だと感じた。

教育実践研究発表大会から

令和2年1月7日（火）、「令和元年度いわき市総合教育センター教育実践研究発表大会」が開催され、市内外小・中学校等の教育関係者約240名が参加しました。

第1部では、「3つの資質・能力の育成を目指す『主体的・対話的で深い学び』への授業改善～子ども一人一人の確かな学びを支える授業のあり方～」のテーマのもと、各部会毎に分かれて、18名の調査研究委員が発表を行いました。子どもたちが「どのように学ぶか」という視点から、授業改善の方向性を自らの実践を踏まえて提起した発表内容には説得力があり、参加者同士のグループ協議も大変活発なものとなりました。調査研究委員の授業実践は、「教師力upの素」としてネットワークドライブ上にアップしていますので、授業改善の方向性を探る“手がかり”として捉え、自校の実態を踏まえてご活用ください。

第2部では、演題「『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善」～対話の授業で一人一人

の主体性、思考力をどう育てるか～のもと、田中博史先生（前筑波大学附属小学校副校長、「授業・人」塾代表）の講演がありました。田中先生のお話を聞くのを楽しみにしていた参加者も多く、その期待を裏切らないユーモアと示唆に富んだ講演でした。大人（教師）の姿勢が子どもの主体性や思考力を育むことに大きく関係していること、子どもに求める前に教師ももっと主体的に考えたり対話をしたりする必要があることを改めて認識しました。

○ 参加者からの感想

- ・ 教師として日々行っていることをもう一度問い直したり、意味があることか、こう改善したいという気持ちが生まれたりした。変えていくことを肯定的に話してくださり、とても力が湧いた。
- ・ 対話的な授業を効果的に行うには、相手意識が大切であることが分かった。私も授業で対話を取り入れるが、形式的になっていないか、必要性があるのかをもう一度見直していきたい。

令和元年度 いわき市総合教育センター事業報告

【研修調査室】

「学びつづける教員の育成」「教育実践への直結」「教育課題の解決」を目指し、本年度も研修業務を推進してきたところですが、重点として、次の点を意識して取り組んでまいりました。

- 1 福島県版校長及び教員としての資質の向上に関する指標に基づき、研修体系を見直しました。隔年開催の研修の設定、1日研修を半日研修に調整、県教育委員会との共催研修の増加等、研修内容を焦点化するとともに、ライフステージに合った研修を意識しました。
- 2 校外研修でインプットした研修内容が各学校で十分生かされるよう、研修終了時に「今後学校で生かしたいこと」について意識化を図りました。また、OJTを通して日常的に学び合う校内研修の充実や、自律的、主体的に行う研修の必要感から「経験者研修Ⅱ」「ミドルリーダー養成研修」「経験者研修Ⅲ」で「研究推進研修」を位置づけました。
- 3 新学習指導要領完全実施に向けて、研修内容の重点化を図るため、特に「授業力向上講座」では新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善を意識した研修を進めました。プログラミング教育、外国語教育、中学校道徳科等の課題に対応する研修講座を開設し、教育現場の課題解決に向けた研修の充実を図りました。
- 4 カリキュラムセンターとして、教職員用PCに「総合教育センター配布用（Kドライブ）」を作成しました。「冊子」「各種様式」「研修資料」等をダウンロード可能にし、センター情報について、セキュリティ強化を図りながらより活用しやすい環境構築を推進しました。

以上の重点事項に基づいて、実施した研修への参加者（のべ数）は次のとおりです。

基本研修Ⅰ	1,662名
基本研修Ⅱ	1,373名
専門研修	1,992名
その他の研修	512名
計（1月20日現在）	5,539名

この他、要請訪問や出前講座等でも当センターを活用いただきました。子どもたちのために、今後も研修の充実を図ってまいります。

【教育支援室】

今年度、教育支援室の指導主事が1名増員されたことを受け、

- ① 教育相談に関すること
- ② 不登校・引きこもりに関すること
- ③ 特別支援教育に関すること
- ④ 家庭支援に関すること

の4つの事業を、より充実させることを目標に取り組んできました。今年度の取組みの中で、特に成果のあったものについて紹介します。

1つ目は、教育相談の取組みです。12月末現在で1,168件の相談に教育相談員、スクールカウンセラー等で対応しました。必要に応じて心理検査を実施し、児童生徒の日頃の姿と検査結果から、児童生徒の特性を考え、支援についての助言も行っています。さらに、災害の被害にあった児童生徒のカウンセリングの依頼を受け、緊急にスクールカウンセラーを派遣することも行いました。このように、学校と保護者のニーズに応じた教育相談を進めることができました。

2つ目は、不登校に関する取組みです。チャレンジホームでは、児童生徒に自分のことを見つめ、より自分を知る機会や、成功体験を通して自信を持たせることができるよう日々支援を行っています。今年度は、いわき海浜自然の家の「心のケアが必要な児童生徒を対象とした事業」と連携することにより、自然体験や交流体験の機会を提供していただき、多くの活動を通して、他者とのかわりの楽しさを味わわせることができました。

3つ目は、特別支援教育に関する取組みです。「特別支援教育の視点を生かした、すべての児童が分かる・できるユニバーサルデザインの授業づくり」をテーマとして、校内研修に取り組む小学校に、継続的に支援を行いました。授業研究では、教員全員で支援の必要な児童を中心に、一人一人の学びを見取り、授業を評価することで、教員の授業力の向上を図ることができました。

これらは、教育支援室が学校内外の関係者をつなぎ、チームとして取り組めた成果であると考えます。

〈令和2年度研修調査室の重点〉

研修調査室では、「働き方改革」と「研修の質の向上」をテーマに来年度の研修講座の見直しを行いました。その方針としては、次の3点です。

- 1 福島県教職員指標に基づく研修が効果的に実施できるよう基本研修体系の見直しと講座内容の重点化を図る。
- 2 学校の組織力強化に資するため、中堅教員の指導力向上を目的に経験者研修Ⅱからミドルリーダー養成研修、そして研修経験者研修Ⅲに対する研修内容の系統性と重点化を図る。
- 3 喫緊の課題である小学校におけるプログラミング教育や外国語科など新学習指導要領完全実施に対応する研修等の充実を図る。

以上の方針をもとに、協議を重ね基本研修の改善を図りました。その概要は以下の通りです。

【初任研】

- 校内研修時間の削減 150時間→135時間
- 校外研修日数の削減 22日→17～20日
- ※ 磐梯青少年交流の家での宿泊研修や当センター計画の校外研修を6日分削除し、授業参観等の充実を図るため校長裁量で計画できる連携校研修を1～4日設定する。
- メンター方式の研修体系を構築する。

【3年次研】 削除

【中堅教諭等資質向上に関する研修】

- 経験者研修Ⅱ：授業力向上に重点を置く。
- ミドルリーダー研修：学校組織・カリキュラムマネジメント研修を必修とする。
- 経験者研修Ⅲ：スペシャリスト育成に資するため選択研修を拡大する。

【喫緊の課題に対応する研修】

- プログラミング教育研修や外国語教育に関する研修（県との共催）の充実を図る。
- 教頭実務研修に学校の防災管理に関する研修を実施する。等

その他の基本研修も精選し、重点化を図りました。詳しくは、令和2年度いわき市教職員研修計画をご覧ください。

4月より3階図書資料室の本の貸出やアーカイブコーナーの利用が可能となります。

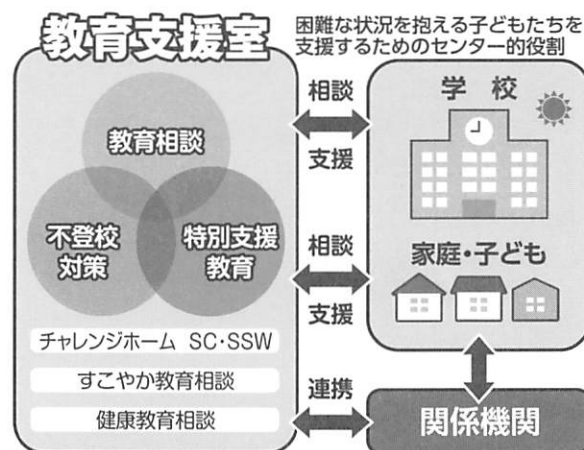
〈令和2年度 教育支援室の重点〉

教育支援室では、11月、学校を対象に、「教育支援室の活用状況及び効果に関する調査」を実施しました。その調査結果から、

- 75.5%の学校が教育支援室を活用したこと
- 教育相談事業を最も活用していること
- 児童生徒理解や保護者との連携に効果を感じていること
- 児童生徒が抱える課題に対する対応を求めていること

が明確になりました。

これは、「困難な状況を抱える子どもたちへの支援」「一人一人の教育的ニーズを踏まえた支援の充実」という教育支援室の設置目的と合致しているとともに、さらなる充実が求められている状況と受け止めております。



そこで、教育支援室では、次年度も、

- ① 教育相談に関すること
- ② 不登校・引きこもりに関すること
- ③ 特別支援教育に関すること
- ④ 家庭支援に関すること

を柱に、「学校」「保護者」「関係機関」それぞれとの関係をさらに強めていきたいと思っています。そして、「学校⇄保護者⇄関係機関」の連携がさらに深まるようなセンター的役割を担っていきたいと考えています。

上記①～④に関して、何らかの不安や悩みを感じた際には、迷わず、教育支援室をご活用ください。